

演題名 X線単純撮影でわかりにくい微細骨折における超音波検査の有用性  
～整形エコーのススメ～

施設名 四万十町国保大正診療所

発表者名 大川 剛史

共同発表者 医師 岡聡司, 石井隆之, 北村亘, 中川大輔、佐藤真紀、看護師 伊藤浩史

発表者メールアドレス [ots14familytaishou@yahoo.co.jp](mailto:ots14familytaishou@yahoo.co.jp)

#### 発表内容

##### 【はじめに】

地域医療に従事する医師においては、その専門を問わず外傷性疾患の診療に当たる場面が多い。

特に骨粗鬆症を背景に持つ脆弱性の微細骨折の診断においては、X線撮影の技術に熟練している診療放射線技師の撮影画像でも、診断に難渋することがある。

まして、夜間や休日など技師が不在の場合には、撮影技術に習熟していない医師が撮影を行うこともある施設では、やはり、診断に迷うことがある。

近年、整形外科領域における超音波検査を用いた診断法が注目されている。

X線検査で疑わしい骨折の診断に超音波検査を用いることの有用性について検討したので報告する。

##### 【方法】

平成27年4月～平成28年1月に当診療所を受診した患者。

明らかな受傷機転、四肢や胸郭部の強い圧痛点の存在、体動による疼痛の増悪などから臨床的に四肢・肋骨骨折が疑われ、X線撮影を行い、明らかな骨折の所見が認められなかった患者に対し、リニア型探触子(プローブ)を用い、骨折の所見がないか超音波検査を行った。

##### 【結果】

四肢の微細骨折でも超音波検査は良好な結果であった。

微細骨折の診断においては、超音波検査は比較的技術の習熟を必要とせず、また被曝の心配がない。

一方で圧痛点にプローブを当てることにより、患者の苦痛につながる可能性があり、留意すべきである。

##### 【考察】

微細骨折の悩ましい所見や軟部組織の診断において超音波検査は非常に簡便かつ有用であり、積極的に施行することが望ましいと考えられた。

X線検査で画像所見がなくても骨折を疑う場合は超音波検査を追加することで骨折の有無を確認できる。

X線画像を再度検証することで新たな角度や撮影法の確立ができるようになり、X線撮影技術の向上に繋がる。